発災直後（宮城県社協では）

- 身の安全の確保とともに、情報の無さに身動き取れず。
- ラジオと携帯電話のワンセグテレビが情報源。
- 家族の安否も取れないため、当日は解散。
- 翌日より本格的な情報収取を開始。

県内の情報収集

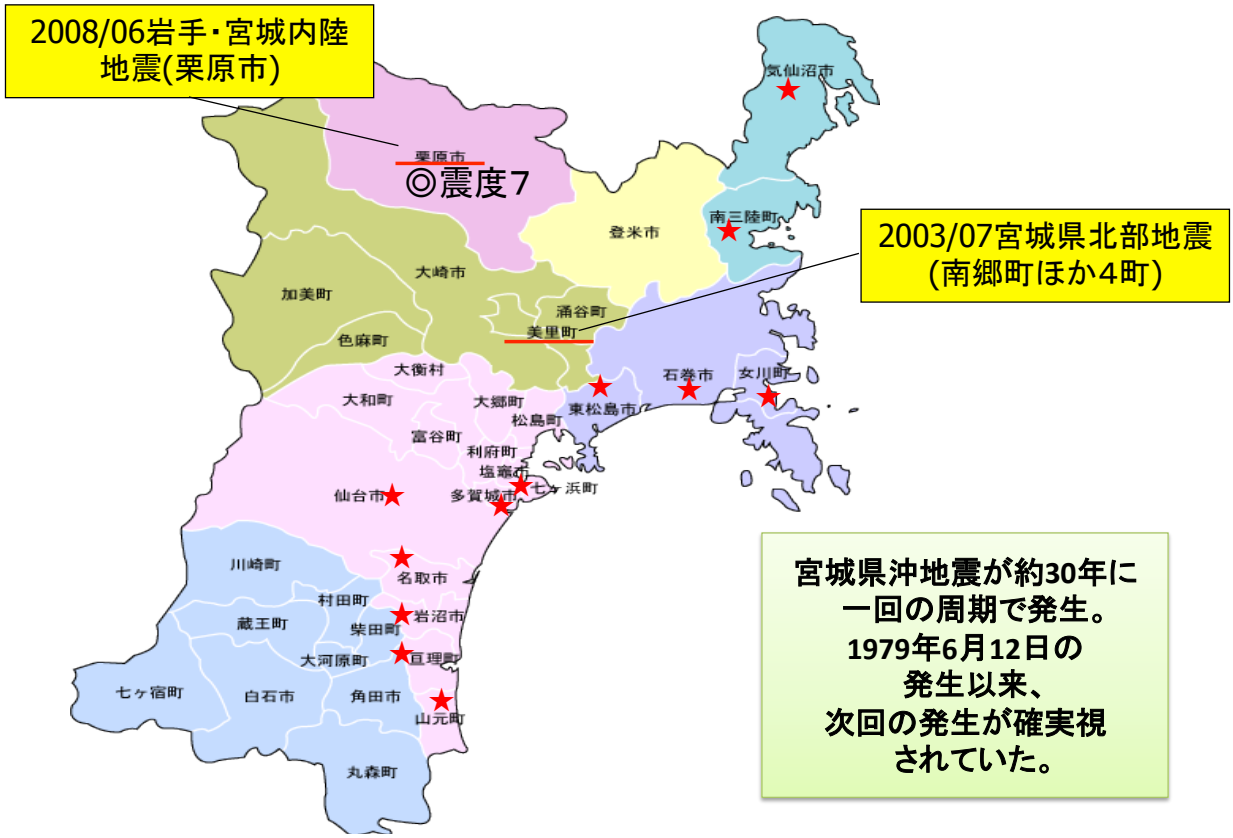
- 事前の情報収集ルール、機能せず。情報収集は自らの足でやらざるを得ない状況。
- 市町村社協職員の安否確認が最優先だった。

⇒様々な状況を抱えながら果たさなくてはいけない役割・責任

⇒職員のケアの必要性

⇒我々の最終目的は？

宮城県沖地震に向けた取り組み



宮城県沖地震が約30年に
一回の周期で発生。
1979年6月12日の
発生以来、
次回の発生が確実視
されていた。

協働型　県災害VCの特徴

- 単体では対応できない規模
- 市町村の情報収集、状況の把握をどうすべきか
  →多様な団体との連携の必要性

- 市町村災害VCがパンク
- 沿岸部へのアクセス課題
  →ボランティアバスパック

被災地社協支援における県社協の6つの視点

スーパーバイズ・コーチング力

客観的『助言・アドバイス』

活動の主体である被災地社協は、直面する課題の対応に埋没したり、長期的な視点がもてなかったりしがち。鳥の目の視点でアドバイスを。

愛情的『苦言・叱咤激励』

日ごろから共に活動を行い、その先も継続して支援できる県社協だからこそ、励ますだけではなく、後押しの意味も含め苦言や厳しい意見を客観的立場から伝えることも必要。

コーディネート力

広域的『つなぎ役』

社協の持つネットワークは強力。全国に専門的な力を持つ支援者は多い。その力を被災地にタイムリーにつなぐ、またはその調整をおこなう。

総合的『情報収集と提供』

被災地で交わされる様々な情報を集約し、県域全体の情報集約につなげるとともに、被災地外の情報を提供する。

代替力・マンパワー

協働的『マンパワー』

「共に」取り組む姿勢を基本に、慢性的な人材不足を補い、時に被災地社協の一員となって被災地社協の支援とする。

補完的『レスパイト』

一員として力を発揮することにより、被災地社協職員の休息休憩を取り易くする、それらによりリフレッシュを促す。